

よく喰しよきもの也、右のごとくして焚ば、大體貳升の米にて五合は徳分也、

〔甲子夜話^{十二}〕徳廟^{○徳川}御飯ノ炊カタ格段ヨク出來タルトキハ、御膳所ノ小吏へ御沙汰アリ

テ、折々御褒美金ナド下サレンガ、御料理向ノ物ハ、イカ様ニ御口ニ叶ヒタル時モ、遂ニ御褒美ノ御沙汰ハ無リシトナリ、

〔三省録^{後編}〕鍋なくて食するやう、米を手拭につゝみ、水にてよくぬらして地を掘り埋み、その上に火をたけば飯になるなり、

〔南總里見八犬傳^{九輯}〕第二百二十八回^{犬士露宿して追隊を迎ふ、老僧袂を襲て冥罰を示す、}

姑且して、信乃は、毛野にいふやう、見らるゝごとく、這米は才^{わづか}に二升あまりあり、^{○中}都て二十八

名の食料なれば、粥に炊ずは一碗を、各啜るに足ざるべし、那^{かの}白屋に鍋はなきやと問へば、毛野は

頭を掉て、否^{かしこ}那里には簀子に布たる敗筵一枚あるのみ、鍋釜などはあらずといふ、答を道節うち

听て、之からは和殿^{わのどの}們も知るごとく、其米を囊の儘に水に浸し、壤に埋めて、上にて柴を焼ときは、

蒸れて廳て飯に做るべし、こは野陣して鍋なき折戰飯^{ひんせんめし}を炊く者の、必ずなる事なれども、人の多

きに米寡きは粥より外にせんすべなしといへば、莊介點頭^{うなづき}て、現^{げん}この米にて足らざれば、一握宛

也とても、一宵の餓を凌ぎもせん、そも鹽なくては不便にこそといふを、毛野は見かへりて、否鹽

はあり、鹽はあり、^{○中}又その前面^{ひかひ}なる大竹藪に、多く筍兒^{たけのこ}の生たるを見き、筍兒は自生の儘、抜か

ずして梢を伐棄、然而竹の枝をもて根まで、よく節を申きて、上より醬油を沃き入れ、その四下^{よた}の

土を穿て、何まれ薪にして焼ときは、その筍兒蒸熟して、味ひ煮たるに勝れども、如此すれば、その

明年其頭^{その}に筍兒出ることなし、寔に好事の驕饌なれば、其に倣んとにあらぬども、藪なる筍兒を

穿採して、开も壞蒸に做すらば、飯の足らざるを補ふべき、合菜^{あはせもの}に妙ならずや、^{○下}

〔類聚名義抄^八〕強飯^{コハイヒ}

強飯